

渡邊輝道先生の「功績」について

渡邊輝道先生は、昭和十二年十月二十五日京都市にご生誕、昭和三十七年三月京都大学文学部文学科（国語学国文学専攻）をご卒業、同年四月より大阪府公立学校教員および京都学芸大学附属高等学校（のち京都教育大学教育学部附属高等学校に校名変更）教諭を勤めた後、昭和五十四年四月高知大学助教に採用となり、昭和五十八年四月高知大学教授に就任されました。在職中、平成五年五月から同年九月まで同大学評議員、平成五年九月から同七年九月まで同大学学生部長、平成七年十月から同八年九月まで同大学評議員、平成八年十月から同十二年九月まで人文学部長、平成十一年十二月から同十三年三月まで学長特別補佐に併任されるなど、数々の要職を歴任されました。平成十三年三月高知大学を停年退官、同大学名誉教授の称号を授与され、令和二年十一月十二日にご逝去なさいました。

この間、先生は、永年にわたり教育・研究に尽力されました。

教育面においては、日本文学特に専門分野である日本古典文学の教育指導に携わられました。主な担当科目は、「物語を読む」・「日本文学概論」・「日本古代文学演習」・「日本古典文学論特論」・「日本古典文学論演習」などであり、卒業論文や大学院修士論文の指導学生は多数に及び、専門分野である平安時代文学を中核として、ひろく日本語学日本文学の諸領域にわたって、学部生・大学院生の論文作成を指導されました。それらのうち幾篇もが高知大学国語国文学会発行の学術誌『高知大国文』に掲載され、また先生の熱心な指導を受けた学生の中には卒業後、高知県をはじめとした地域の国語科教員として活躍している方も数多くいらっしゃいます。

研究面においては、主として平安時代の和歌文学について、国語学的方法を文学研究に融合させた表現論的研究を遂行されました。『後拾遺和歌集総索引』（共著・清文堂）、『万葉集八代集歌末語索引』（共著・洛文社）、『栄花物語―本文と索引』（共著・武蔵野書院）のような基礎作業の上に着実な論を展開し、『古今和歌集』『後拾遺和歌集』の表現や更に広く王朝和歌の「歌語」についての論、『土佐日記』や『大和物語』などの作品研究についての論を発表なさいました。また並行して現

行の日本語辞書の代表である『日本国語大辞典』（小学館）や『日本語文法大辞典』（明治書院）の項目執筆、文法教科書およびその解説書『古典の文法』・『古典の文法 別記』（共著・中央図書）の執筆もなさっています。これらは、いずれも、当該分野の研究を推進するに力となった業績であります。

さらに教育行政などの面においては、先生は、高知大学評議員、学生部長、人文学部長、学長特別補佐として、大学運営に大きく貢献なさいました。ことに人文学部長在任時には、人文科学系の人文学科・社会科学系の経済学科の二学科体制を、人文科学系の人間文化学科・社会科学系の社会経済学科・人文科学系と社会科学系融合の国際社会コミュニケーション学科との三学科体制へ改組すること、また、大学院人文社会科学研究科の新設に尽力され、それを成し遂げたことは、特筆に値する業績であります。

地域貢献、社会貢献活動については、在職中より、地域住民を対象とした講演・講座等に数多く出講なさったり、高知大学を停年退職後は、放送大学高知学習センター長を務められるなど、地域における社会教育に従事なさいました。

学会での活動としては、表現学会、中古文学会、和歌文学会、国語学会、解釈学会に所属、表現学会では理事を務められ、学会の発展に貢献なさいました。

以上のように、先生は、大学の教育研究活動のみならず、地域社会の文化レベルの向上において、幅広い知識と見識を持って貢献され、その功績は誠に顕著でありました。

これらの業績に対して、高知大学からの申請により、令和二年十二月十一日に、従四位に叙せられ瑞宝中綬章を授けられる旨、閣議決定がなされました。

（本学教授 福島 尚 記）

エレベーターで人文学部棟を五階まで上がり、左手に進むと、薄暗い廊下が伸びている。南側に並ぶ研究室の、あるドアをノックするが、反応はない。ノックする音が響くだけである。今日もダメか、とあきらめて戻ろうとした時、ガチャツと二つ奥のドアが開き、「君、どうしたの？」と声をかけられた。「補導教官になっていただきたくて」昭和五十五年の春、高知大学に入学したばかりの私は、近代文学の永田哲夫先生の研究室を何度か訪ねていた。「先生はお休みされているから」「そうですね」そして、その丸顔に四角い眼鏡をかけた男性は少しためらってから、「補導教官、僕じゃダメ？」と言った。「え、いや、ダメじゃないです。お願いします」これが、渡邊輝道先生と交わした最初の会話だった。

国文学概論では、『竹取物語』を「斑竹姑娘」や「天の羽衣」の伝説と比較し、別離の悲しみにこそ文学性があることをご教授くださった。また、国文学演習では、『大和物語』をテキストに、学問することの基礎の基礎をお教えくださった。結局、私は『大和物語』で卒業論文を書くことにした。

ある時、研究室にお邪魔し、何人かの学生と一緒に談笑していると、不意に先生が「君は小説よりも、評論か何か書いた方がいいんじゃないかなあ」とおっしゃった。その時は、なぜそんなことをおっしゃるのかよくわからなかったが、後から考えると、当時、地元新聞社主催の小説コンクールに応募したことがあり、どなたかお知り合いの方からそのことをお聞きになっていたのではないか。「君は、小説なんか書いてもモノにならないから、やめた方がいい」という忠告を、先生流の物言いでおっしゃったに違いなかった。また、先生のご紹介で今も勤める学校に就職できたのだが、当時の教頭を「あんなの『赤シャツ』だよ。君、それぐらい見抜かないとだめだよ」それから、私が見合いをして交際中、相手の女性の友人が、先生に私の人となりを問い合わせたらしく、結婚後、妻から「こんにやくのような人って言われた」と聞かされた。学生時代、確固たる主義主張もなく、何にでも首を突っ込んでいたからだろう。いずれも、まさに慧眼だった。

私の職場と先生のご自宅がともに土佐道路沿いにあったため、先生がご退官された後も、何度か偶然お目にかかることが

あった。フジグランに向かいの、かつてあった遊戯場で「川村君、ここは出るの？」と聞かれたが、実はそこで先生をお見かけしたのは二度目だった。ある時は、大原町の市営球場近くの土佐道路の歩道を、なぜか立ち漕ぎせんばかりに自転車を走らせていらつしやるのをお見かけしたこともあった。

平成三十一年三月三十日、小松博さんの呼びかけで「渡邊先生を囲む会」が開かれ、私も同席させていただいた。少しお歳は召されていたが、以前とお変わりのない、歯に衣着せぬ小気味のよいお話しぶりに、一同、楽しい時間を過ごさせていただいた。車で来ていた私が、先生をご自宅までお送りすることになった。まだ少し肌寒く、春雨がしきりと降っていた。先生は途中、「あの、君の向かい側にいた女性は、誰さんだっけ」私がお教えすると、「ああそうか、〇〇さんか、これは申し訳ないことをしたなあ、悪いことをしたなあ」と、しきりにつぶやいておられた。「先生、入口までお送りしますよ」「いいよ、いいよ。大丈夫」先生は小雨に濡れながら、路地に向かわれた。「お気をつけて」「うん、うん、ありがと」これが、先生と交わした最後の会話だった。

振り返るに、先生は気遣いの人であった。私たちの知らないところで気遣ってくださり、私たちがいつも見守ってくださっていたのではないか。そんな風に思え、今はただ感謝の念に堪えない。

（昭和五八年度卒業 高知学芸高等学校教諭）

渡邊輝道先生の思い出

小松 博

私が渡邊輝道先生の訃報に接したのは、オンラインで開催された令和二年度第六十九回高知大学国語国文学会研究発表会での福島尚先生による開会のご挨拶の時である。お話し好きでいつも豊饒とされていた渡邊先生の印象しかなかったので、驚

いたが、十年ほど前に他界した父より一歳上の先生のお年を考えると、ついに来るべき時が来たと思ったことであつた。

私が最初に受講した渡邊先生の授業は、三回生の時の「国文学演習Ⅰ」である。『後拾遺和歌集』についての演習であつたが、先生は関西弁の軽妙な語り口で示唆に富む指導や助言をくださった。私達はしばしばその優れた話術に引き込まれた。時には厳しいお言葉を頂き、襟を正して聞く場面もあつた。演習を通じて文学研究の心構えや手法の基礎を学んだと思う。

卒業論文は、近代文学担当の谷川恵一先生のもとで夏目漱石研究に取り組んだので、四回生では渡邊先生の講義を受ける機会はなかつた。しかし、当時の国語国文学研究室には、家庭的で温かい雰囲気があり、春秋のハイキング、卒業生追いつしコンパ、国語国文学会、国語史研究会など、先生方と学生との交流や親睦の機会が多く、学生は先生方に尊敬と親しみの念を抱いていた。酒席で同席することも多く、酔つた勢いで無礼講とばかり世間話を切り出す学生や、裏話を聞き出そうとする学生もおり、先生方も合わせてくださつて様々な会話を楽しんだ。酒席でも渡邊先生は大人気で、先生のそばにはいつも多くの学生が集まつていた。当時の写真を見ると、和気藹々とした国語国文学研究室の様子が懐かしくよみがえってくる。

卒業後、私は高知県立高校の国語科教員になつたので、高知大学人文学部国語国文学研究室とのつながりは続いた。

毎年開催される国語国文学会研究発表会には、最新の研究に触れ、アカデミックな空気を味わえるとともに、懇親会で懐かしい方々と酒が飲める楽しみもある。同窓会気分ですぐ参加した。ある年の閉会挨拶で、渡邊先生がユーモアを交えて、「私の目の黒いうちは、この会を潰す訳にはいきまへん。」とおっしゃり、笑いに包まれたことが今でも思い出される。

高知県高等学校教育研究会国語部会事務局を務めていた際には、渡邊先生が研究会の発展と高知県の高校国語教育充実のためとお世話してください、高知大学人文学部のご協力を得て、谷川恵一先生や中森健二先生の講演が実現した。

平成十三年には、渡邊先生ご自身に「古典教育について」講演していただいたが、当方の不手際で参加者が少なく、大変恐縮した。慰労会で、愛媛県では百人ほどの聴衆で会場が埋まつた話をされ、県民性の違いについて述べられたが、「小松君と濱渦君とこうして飲める機会ができた。」と喜んでくださり、少しほっとして、先生の優しさに心から感謝したことだつた。

また、高知西高校勤務時代には、同僚の合田敦子先輩から、近所のスーパーで渡邊先生に偶然お会いした際、放送大学で教員専修免許状を取得することを勧められたという話を聞いた。勤務校が大学と近かつたこともあり、私は早速入学した。当時、先生は放送大学高知学習センター長をされていたので、先生とは二回目の師弟関係を結ぶに至つたのである。

先生が高知大学を退官された平成十三年と放送大学高知学習センターを退官された平成二十年には、卒業生が集まって祝賀会を開催したが、それ以降は十年以上ご無沙汰していた。しかし、他の卒業生から、高知市内の路上やスーパー、書店等で先生と邂逅したという話を何回か聞くうちに、高知にいらっしやるのなら是非またお会いしたいと思っていた矢先、合田先輩から先生を囲む会の開催について提案があり、早速、他の卒業生十人ほどに連絡をとって準備を進めた。

こうして、平成三十一年三月、「渡邊先生を囲む会」が再度実現したのである。卒業後三十三年を経て再び恩師を囲むことができたのは感慨無量であった。先生は数年前に大病をされたそうだが、この日は以前と変わらずお元気な様子で、お話を聞きながら一同楽しいひと時を過ごした。しかし、これが先生とご一緒させていただいた最後の機会となった。お帰りの際、川村先輩の車から手を振られていた先生のお姿が今でも心に残っている。

先生からいただいたご恩に深謝し、ご冥福を心からお祈り申し上げます。

合掌

(昭和六〇年度卒業 中芸高等学校 校長)

渡邊輝道先生追悼

濱 渦 一 正

私が高知大学に入学したのは、昭和五十九年、人文学部が文学科と経済学科との二学科だった頃でした。比較的得意分野だった、古典文学を学ぶべく文学科に入学しましたが、当時、専門科目の授業は二回生(当時の呼称)で専修に分属されてから。そのため、渡邊輝道先生に直接お会いしたのは二回生のことでした。

先生の授業を初めて受けたのは、「国文学概論」でした。この授業の最初で、私は先生の存在を強く印象付けられることになります。最前列の席に着いていた私に、先生は、資料の配布を手伝うようにおっしゃいました。配布し終わり、席に戻る

うとする私に、先生は、「今後も資料があるときは、君に配布をお願いします」と、配布係を命じられました。今振り返ると、それほど配布の機会は多くはなかったように思いますが、一度、先生よりも遅れて教室に入ったとき、先生がご自身で資料を配布されていました。「しまった今日に限って……」と悔やんでいると、先生は、「君が遅れてくるとは何事だ」と、優しく笑顔を浮かべながらおっしゃったものですから、かえって印象に残る失敗となっていました。

学生時代を振り返ると、先生とのことでは、様々なことが思い出されますが、その中でも、特に忘れられないのは、四回生の五月半ば、両眼の手術を受けるために、高知医科大学附属病院に緊急入院したことです。手術が終わりしばらくしたころ、渡邊先生が、当時中国文学を担当されていた山田英雄先生とお二人で病室に来てくださいました。まだ身動きが取れず、恐縮しきりの私に代わり、居合わせた母が応対をしたのですが、先生は、私の執刀医について、「関西でも指折りの先生ということですから、まず大丈夫だと思っています」と、一言で、私たち親子の不安を払拭してくださいました。

無事卒業までこぎつけた私ですが、卒業後も紆余曲折を経て、高等学校の教職を得て、ようやく落ち着いてくると、様々な仕事をする中で、再び先生のお力を頼ることもありました。高知県の高等学校の国語科教員が参加する研究会では、講師を快く引き受けてくださいました。今でこそ高大連携という言葉はよく聞かれるようになりましたが、それ以前から先生は、高等学校とのつながりを大切にされていました。

高等学校の進路指導部に籍を置いていた時には、入試説明会など、機会があることに先生の研究室を訪ね、お話を伺ったものでした。また、私の結婚披露宴のスピーチをお願いしたこともありました。先生はその都度、お時間を割いてくださいました。

全国の国立大学が大きな変容期を迎え、人文学部長として先生が学部改組に取り組まれていた時、私が「お忙しいでしょう」と話を向けると、「むっっちゃ」と先生はおっしゃいました。今でもその時の先生の表情や声のトーンまで鮮やかに思い出されるほど、強く印象に残っています。先生が全身全霊で、職務に取り組まれている、そうした迫力というのでしょうか、おそらくそのようなものを感じ取ったからではないかと思えます。

先生には、教養を追求すること、人としての懐を大きく持つことなど、教職にあるものとして持つべき姿勢を教えていただいたと思います。先生は機会あるごとに、「教師にとって大事なものは、しゃべくりですよ」とおっしゃっていました。学生

時代には、「氣を付けないと、君の話し方はアホダラキヨウになる」、「濱渦のレポートは広がる。空中分解、バーン！」と、指摘されたことがあります。先生のお言葉を思い返すと、三十年近く教職にあつて、もうすぐ定年を迎えようとする齢になりながらも、「未だし、未だし」と、まだやることは数多くあるものだと思つて自分を見つめています。

私の拙い思いを受け止めて、人生の指針を授けてくださった渡邊輝道先生に衷心より謝意を捧げ、追悼の言葉といたします。

(昭和六二年度卒業 須崎総合高等学校教諭)

渡邊輝道先生追悼

澤松 義人

渡邊先生、あなたの訃報を聞いてから、ずっと考えてきた。私はあなたに、どうすれば報いることができるだろうか。随分と、恩を受けてきた。けれど、何も返せていない。一昨年の春あなたに最後にお会いしてから、何かしら目に見える形で報告したいと密かに思っていたが、何も叶わなかった。私は無能で、不肖の弟子だ。

あなたは、家庭の事情で県外への進学が許されなかった私に、国文学を通して日本のトップレベルの世界を見せてくれた。そして、「学問」という素晴らしい世界の存在に気付かせてくれた。

演習系の授業の際、あなたはよく言った。

「いくらでもかかってくるから。叩きつぶしてあげるから」。

当然、議論の話だ。議論には立場の上下も年齢も関係ない。論理だけがすべてだ。だから、学生が教授にいくら議論をぶつけてきても良い。大丈夫。君たちに叩きつぶされるほど、自分は弱くないから。そして議論を真正面からぶつけ合うこ

とは、人間関係に悪影響を及ぼすことなど絶対にならないから。あなたが言ってくれていたのは、そういうことだった。

こういう言葉を本気で言う年上の人間に出会ったのは、初めてだった。格好良かった。あなたの言葉も、それが示す学問の世界も、その言葉を実行できるあなたの学識の深さや懐の広さも。何度もかかかっていつて、何度も叩きつぶされた。叩きつぶされるたび、本を漁り、思考を巡らし、次に「かかかっていく」準備をした。その繰り返し、たまらなく楽しかった。その当時、私を取り巻いていた幾つかの理不尽に絶望しかけていた私にとつて、あなたが示してくれた学問の自由さと潔さと清廉さは、大きな救いだった。確かにあなたは、私の道を輝らしてくれた。

学年が進んでも、「単位はいらないので授業だけは受けさせてほしい」と頼み込んで、前年度と同じ授業を繰り返し受けさせてもらった。あなたはさぞかしやりにくかつたろうと思うが、昨年度からさらに進歩したあなたの姿は、私が目指していた高校国語教員としての指針を形作ってくれた。「昨年度と同じ授業をするのは、恥だ」。実際に高校国語教員となった今でも、忙しさにかまけて授業準備に遅れをとつた時に、この言葉が私を叱ってくれる。

学生の時はもちろん、教員となつてからも何度も飲みに連れて行つてもらつた。「同僚に『研究よりも授業の方に重きを置きすぎる』と怒られる」なんて話も聞いたことがある。教員として実際に過ごしてきて、あなたがそうであつた理由が少しだけわかる気がする。「教えること」は確かに学問だ。こういう場合はこうすれば良い。そんな成長段階や環境条件を無視した一律のやり方では、効果は高くない。一定の方針や方向性はありつつも、その場や各種条件に応じて対応せねばならない。そしてそれは臨機応変でありつつも、同時に論理的でなくてはならない。文学研究や文章読解と同じだった。おそらくあなたは、「教えること」という学問に魅力を感じていたのだ。

あなたの言葉は、本当にたくさん私の中に残っている。ここでは記せない、負の言葉も含めて。毒舌で、他人の価値観に流されることのない人だったが、我々学生に対して本気で接してくれる「先生」だった。あなたには「先生」という言葉を、心の底から言えた。「かかってくるなさい。叩きつぶしてあげるから」。生徒や後輩教員にそう言える教員になりたいと本気で思い、いま目の前にいる生徒や勤務校の未来だけを見て、自分の無能にうろたえ悩みながら過ごしてきたつもりだ。けれどまだ、「実を結んだ」とあなたに胸を張れない。馬が合わないからと貶められることも、お友達だからと最悪されることもない、立場や年齢に関係なく純粋な論理だけで語り合える空間を求めながら、今でも見つけられないでもいる。なにより、充

分だと思えるほどのことを生徒にできた覚えもない。

けれど、それでも時折、卒業する生徒が手紙を残してくれる。近年はその手紙に、「先生の授業を受けて、考えることが楽しくなりました」と書かれていることも増えてきた。そうした手紙を読んだ時、必ず思い出すのは、やはりあなたの姿だ。まだまだ、遠く及ばない。

ああ。ここまで書いてきて、あなたに報いることができるかもしれない言葉が、少しだけわかったかもしれない。私は、あなたの一側面しか知らない。あなたの苦悩も喜びも、十分に知らない。けれど、これだけは確かに言える。

「あなたが私に見せてくれた姿は、疑いようもなくすでに私の一部だ」。

次にあなたに出会う時に、必ず胸を張れるように、生きます。

(平成七年度卒業 高知国際高等学校教諭)

渡邊輝道先生の教え

中村(清水) 陽子

教員の道を選んだ私にとって、渡邊輝道先生は、まさに恩師中の恩師である。先生の教えは三つ。(もちろん、国文学は言わずもがなであるし、この三つは殊更に先生が説いてくださったものではなく、私が勝手に先生の薫陶を受けたと思っただけなのであるが。)私の個人的な思い出と思入れを綴ることを、先生を偲ぶよすがとさせていただければ幸甚である。

黒板を消し終わるまでが授業であること

渡邊先生は、授業の後、必ず黒板をきれいに消してから退室された。当時、他の先生方は、黒板をそのままにされる方や、

目についた生徒に消すように指示してから退室される方が少なくなかったと記憶している。高校時代も、日直が消すきまりになっていたので、私の目には渡邊先生のお姿が新鮮に映ったのだろう。思わず、「先生がご自分で消していらっしゃるんですか。」と申し上げると、「次の先生に迷惑かけるわけにいかんでしょう。ここまではちゃんとやっとかんとねえ。」とおっしゃった。それからは、お願いして黒板を消させていただくようになり、先生とお話する機会が増えた。

なるほど、拭き残しのない、きれいな黒板を前にすると、授業者として気分が高揚する。さあ、頑張ろうという気になる。先生は、次の授業者のいい授業のための、ひいては学生のための心遣いをしておられたことになるのだ。そのことに気づいたのは、自分が教壇に立つようになってからである。

生徒のせいにならないこと

四回生の九月、母校での教育実習に臨んでいた私の授業を、渡邊先生がひよつこりと見に来てくださったことがある。突然のことに恐縮するやら焦るやら、先生の一挙手一投足にドギマギしながらも、何とか授業を終えた。授業後の振り返りの時間を終え、やっと人心地がつきかけた私に、先生はにっこり笑いながらこうおっしゃった。「清水さん、授業が面白かったら、生徒は寝ませんよ。」

その日の私は、ずいぶん言い訳がましい振り返りをしたのだろう。正直、どんなことを申し上げたのか覚えていない。ただ、強烈に覚えているのは先生の言葉。生徒の非を唱える前に、自己を振り返ることを忘れるな。大切な戒めの言葉である。

学び続けてこそ教員だということ

私には、教員の道を諦めかけていた時期がある。その私の背中を押してくださいだったのも、渡邊先生である。当時の私は、最初の教員採用試験を控え、自分の知識や能力のなさに不安ばかりが募っていた。他の道を選んだ方がよいのではと逃げ腰になってしまっていたのだ。悩んだ挙句、私は願書を出さなかった。

そんな折、渡邊先生の研究室を訪れた。先生は、うずたかく積まれた資料の中で、調べ物をしておられた。もう何度もお邪魔したことのある研究室だが、改めて資料の多さに感嘆していると、先生は、「どこまで勉強しても、これで終わりはない

でしょう。増えて増えて。」と苦笑いなさった。この言葉に、私は、「なんだ、そうか。」と目から鱗の落ちる思いだった。私なんか、まだまだ勉強不足で当たり前。最初から完璧にできるはずがない。学び続けていけばよいのだ。何をそれほど気負っていたのかと拍子抜けするほど、気分が楽になった。

結局私は、大学院を経て教員になることを選んだ。先生は、「あなたが学校の先生になるなら、賛成です。向いてるから頑張りなさい。」と言ってくださった。先生がこうおっしゃるのだから、大丈夫。できる。先生に背中を押していただいて、私は今、ここにいる。

よく、優れた教師は価値のある気づきを生徒に与えると聞く。私にとって、先生の言葉はまさにそれであった。頭でっかちで未熟者だった私が、何とか教員になり、続けてこられた。これからも、先生の教えは、きつと私を支える柱であり続けるはずだ。

直接お伝えすることが叶わなかった感謝の気持ちを、この場をお借りしてお伝えしたい。渡邊先生、本当にありがとうございます。ありがとうございました。どうぞこれからも、不肖の教え子をお見守りください。

(平成九年度卒業 須崎総合高等学校教諭)

渡邊輝道先生を偲んで

福島 尚

昨年の十一月十六日、人文事務室よりの訃報通知で、渡邊先生のご逝去を知った。十一月十二日のご逝去で、葬儀については近親者のみですでに執り行われたとのことであった。ご遺族から人事課に叙位叙勲の申請希望のお申し出があったとのこと、追って十一月十七日に、事務方から功績概要並びに功績調書の作成依頼があつて、前掲の「渡邊輝道先生のご功績

について」とほぼ同旨の申請書類案を作成した。

数年前に大動脈解離で緊急手術を受けられたけれども、一命を取り留められたこと、また手術後、腎機能の衰えによって透析に通われていることはうかがってはいたが、たまに自転車に乗っているお姿をお見かけしていたし、少々弱られてはいたが、あいかわらずの口の悪さは健在であった。新型コロナが流行している時節だけにどうしておられるのかと案じていたところに、突然の訃報であった。

私が平成六年四月に高知大学人文学部の「国文」へお迎えいただいてから、先生ご退職の平成十三年三月まで七年間職場を同じくさせていただいた。当方の着任時、先生は学生部長の要職に就いておられて、以後、評議員、人文学部長、学長特別補佐として、国立大学変革期の学部や全学の抱える難題に立ち向かい、それを解決された。そのお姿を間近に拝見していたことになる。先生の口八丁手八丁とでもいうべき活躍ぶりはたいへんなもので、その矢面に立つ反対派からは「京の『いけず』を大阪で磨いた」などと言われたようだが、その一方で人情の機微に通じた気遣いの細やかな面もあって、同僚・学生からたいへん慕われておられた。

平成十年に人文科学系の人文学科・社会科学系の経済学科の二学科体制を、人文科学系の人間文化学科・社会科学系の社会経済学科・人文科学系と社会科学系融合の国際社会コミュニケーション学科との三学科体制へ改組したこと（いわゆる九年改組）、その上で、大学院人文社会科学研究科を新設したことは、人文学部長としての顕著なご功績の一つであるが、その過程で心ならずも組織としての「国文」を解体してしまったことは気になっておられたようで、旧「国文教室」に由来する高知大学国語国文学会に対する思い入れは格別のものであられた。高知大学国語国文学会の生みの親である石津純道先生追悼の高知大文第二十八号の「石津先生の遺言」という文章の中で、学会創立三〇周年記念大会時に面識を得た石津先生のご様子を記した後で、このときに石津先生からかけていただいた「これからの国語国文学会をよろしく」とのお言葉を忘れられないものだとし、「諸先輩の残されたこの遺産をどう継承し、さらなる発展を期すか、事務局を構成するわれわれの責任は重い。私にとってはあの時のおことが石津先生の遺言になった」と記しておられる。渡邊先生こそ、高知大学国語国文学会の中興の祖である。

一昨年の五月頃であったか、大学の研究室を先生はお訪ねくださって、いろいろたいへんな状況にある「国文」の行く末

を案じられてであろう、当方に活を入れて帰って行かれた。それが先生と対面して言葉を交わした最後の機会となった。

終わりに印象に残ったエピソードを一つ。退職後いよいよ研究室を引き払われるというので、山本秀人さんと物の片付けを手伝っていたとき、先生は、ふと「父よあなたは強かった」と戦時歌謡の一節を口ずさまれた。それは、「父よあなたは強かった 兜(かぶと)も焦がす炎熱を 敵の屍(かばね)とともに寝て 泥水すすり草を噛み 荒れた山河を幾千里 よくこそ撃つて下さった」という唄の一節。高知へ単身赴任されて二〇年余り、奮闘された先生の当時の心境だったのだろうか。先生、あなたは強かった。

先生からいただいたご恩に深く感謝し、ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

(高知大学国語国文学会 会長)

「追記」このたびの渡邊輝道先生追悼にあたっては、先生の受業生の方々に追悼文執筆をお願い致しました。多くの方々にお声をかけるべきではありましたが、紙面の都合もあり、かつ先生が高校教育の現場から大学に赴任され、多くの国語科教員を養成されたことをも考慮して、高知県で現に高校教員をなさっている方々に執筆を依頼致しました。県内の高校国語科教員を出身大学・学部別にみた場合、高知大学人文学部国文出身者が占める割合が一番高いのではないかと思われまますので、この機会に、現在「Super Regional University」(全国で最も地域と密着した大学)を標榜する高知大学の「人文学部・国文」の存在感を示しておきたいという思いもあります。今回の企画に賛同されご協力くださった各位に御礼申し上げます。今回お声をおかけできなかった、渡邊先生にご縁ある方々には、事情をご賢察くださってご寛恕をお願い申し上げます。